

内裏図でたどる
京都御所の歴史

KYOTO
GOSHO



京都御所は、平安京の大内裏^{だいだいり}の建築空間の古制を今に伝えるとともに、明治2年(1869)まで、
歴代の天皇のお住まいとして、日本の雅やかな宮廷文化が脈々と継承されてきた場所です。

しかし、その歴史は平坦なものではありませんでした。

内裏は、度重なる火災などにより大内裏の外に移転し、京中の様々な邸宅^{さとだいり}を里内裏としましたが、
元弘元年(1331)に現在の地に定着してからも、再三の火災に見舞われます。

さらに、幕末の安政2年(1855)に造営された現在の京都御所も、明治維新による東京への皇居移転後の荒廃、
第二次世界大戦による大規模な建物疎開という苦難の時期がありました。

京都御所は、永きにわたる多くの人々の尽力により、
幾度もの危機を乗り越えて、今に伝えられているのです。

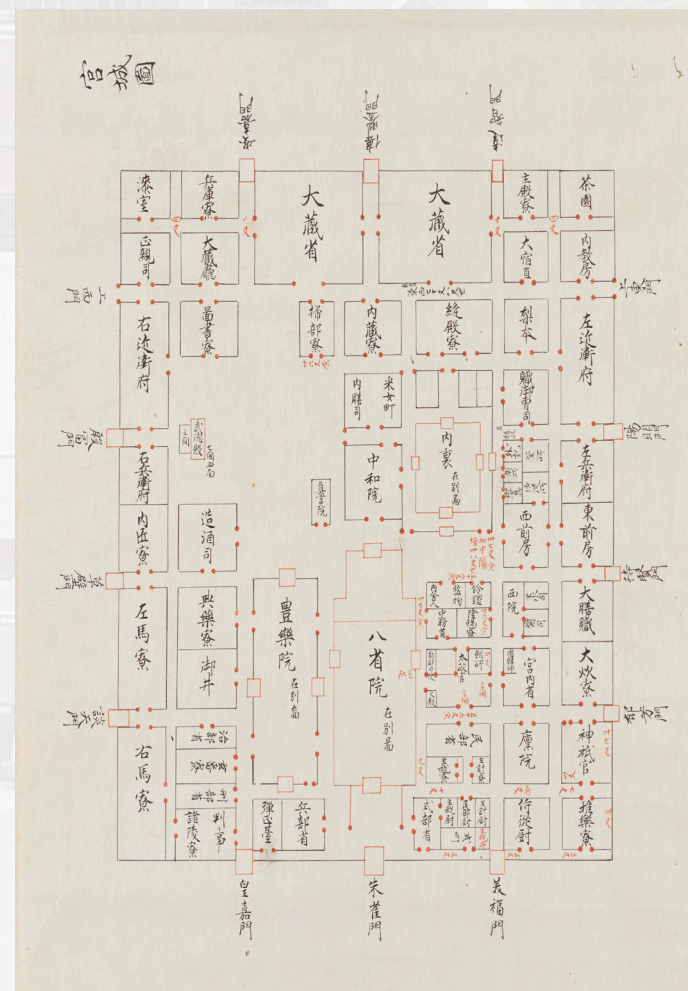


平安時代の大内裏

— 平安京と平安宮 —

延暦13年(794)、桓武天皇が平安京に遷都されました。平安京の北部中央には東西384丈(約1,146m)南北460丈(約1,373m)という広さの大内裏(平安宮)が造営され、その正門である朱雀門は、平安京の中央を南北に貫く朱雀大路に通じていました。

大内裏の内には、国家的な儀礼を行う^{はつしょういん}八省院や^{ぶらくいん}豊楽院、律令制下の役所(2官8省)などとともに、天皇のお住まいである内裏が配置されました。遷都後も造営工事が続けられた大内裏において、内裏は最も早く完成していた区画の一つであり、平安京という都市の核として内裏が存在していました。



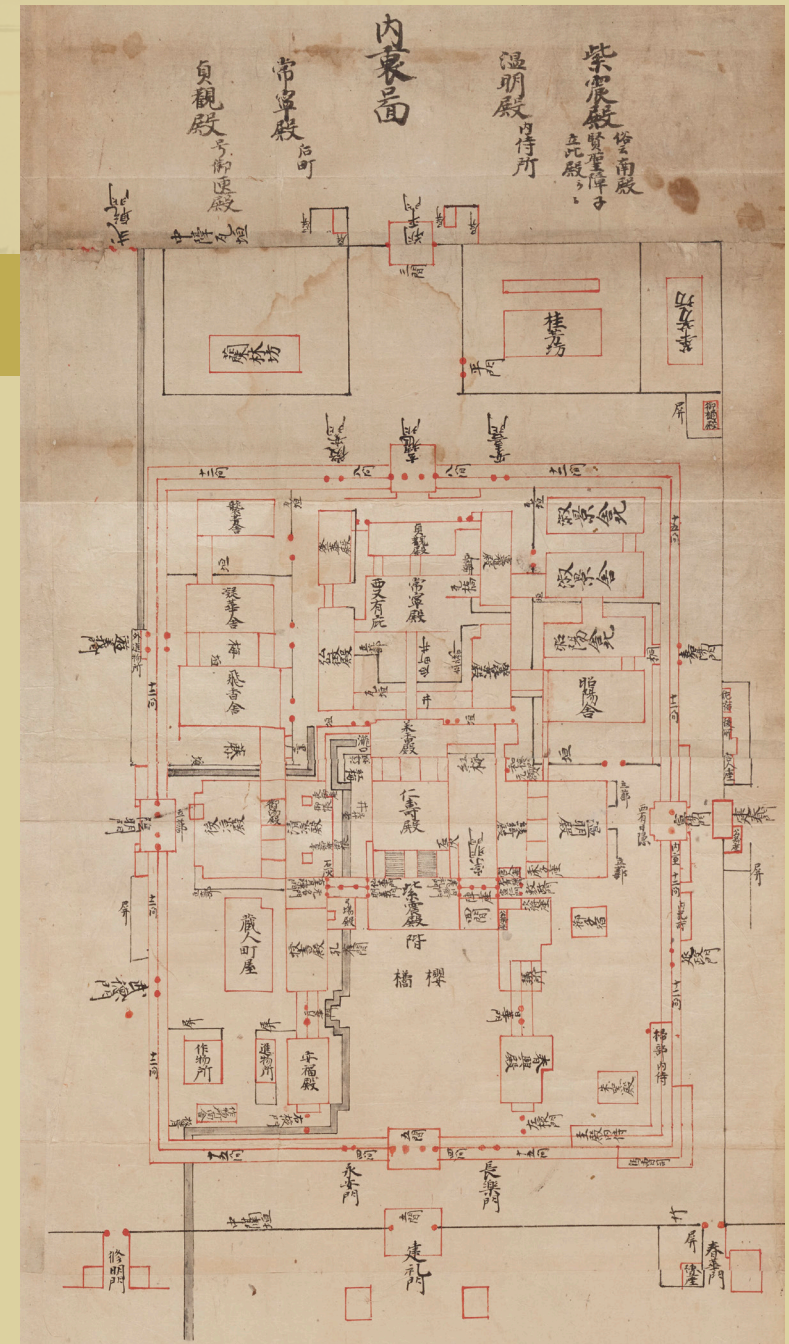
「宮城図」(『宮城図』より) 江戸中期写 宮内庁蔵

平安時代の内裏

— 平安宮内裏と宮廷文化 —

平安宮内裏は、京都御所の2kmほど西にありました。外郭南面に正門の建礼門があり、内部には正殿の紫宸殿を中心として、天皇の御在所である清涼殿や仁寿殿、神鏡を安置した温明殿などの殿舎や、皇后や女御などが住む奥向き(後宮)の承香殿以下7殿5舎等が配置され、各殿舎が渡り廊下や露台で連絡されていました。

平安時代には、内裏を舞台に様々な宮中行事や儀式が行われ、清雅な建築空間を彩る調度品や装束は、和風文化の深化とともに次第に洗練されていきました。一方、後宮では、皇后や女御に仕えた女房たちによる優れた文学作品が生まれるなど、内裏史上最も華やかな時代でした。



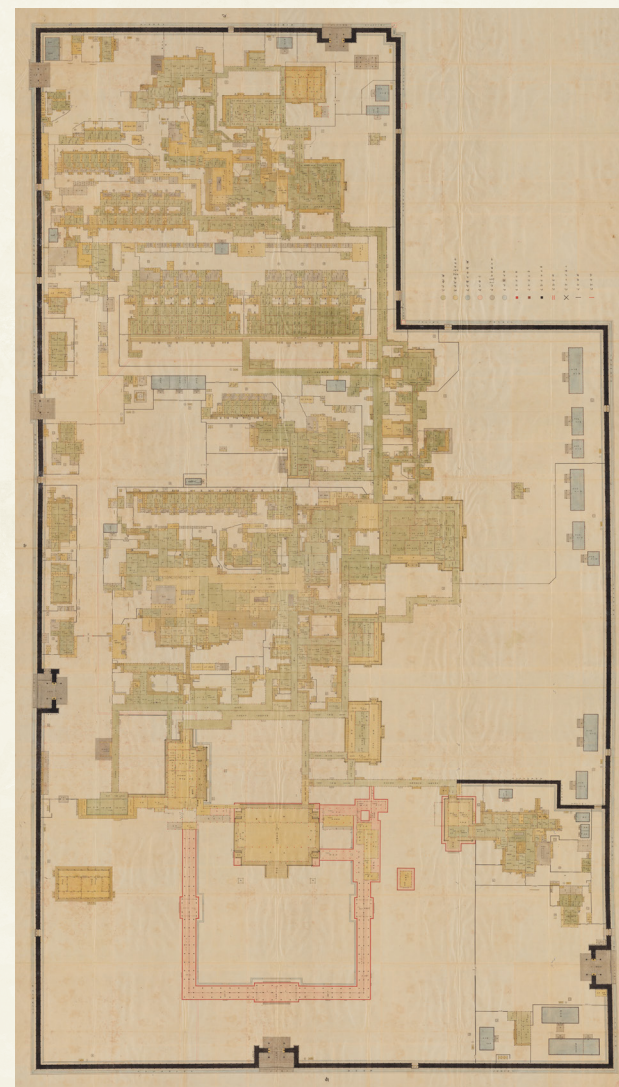
「内裏図」(『大内裏図』より) 室町期写 宮内庁蔵

京都御所の造営

— 平安古制への復古と安政度内裏 —

宮中における重要な儀礼は、平安時代のありかたが後世の模範とされました。しかし、旧儀を再興し、即位の礼のような大儀を往時のままに行うためには、里内裏における略式の建築空間では不十分でした。

現在の京都御所(安政度内裏)の前身であり、寛政2年(1790)に造営された寛政度内裏は、中世以降の歴代天皇の悲願ともいえるべき、平安時代の古制に基づく復古様式の内裏でした。光格天皇のご意向のもと、主な儀式の舞台となる表向きの御殿は、有職故実家の裏松光世(1736～1804)の緻密な建築考証に拠り、一方で居住を旨とする部分は実用性を重視した様式とするなど、構造や意匠、材料に至るまで、徹底した取捨選択が行われました。安政度内裏は、寛政度の基本的な造営方針を受け継いでおり、用途に即した内裏建築の特徴と様式の移り変わりを見ることができます。



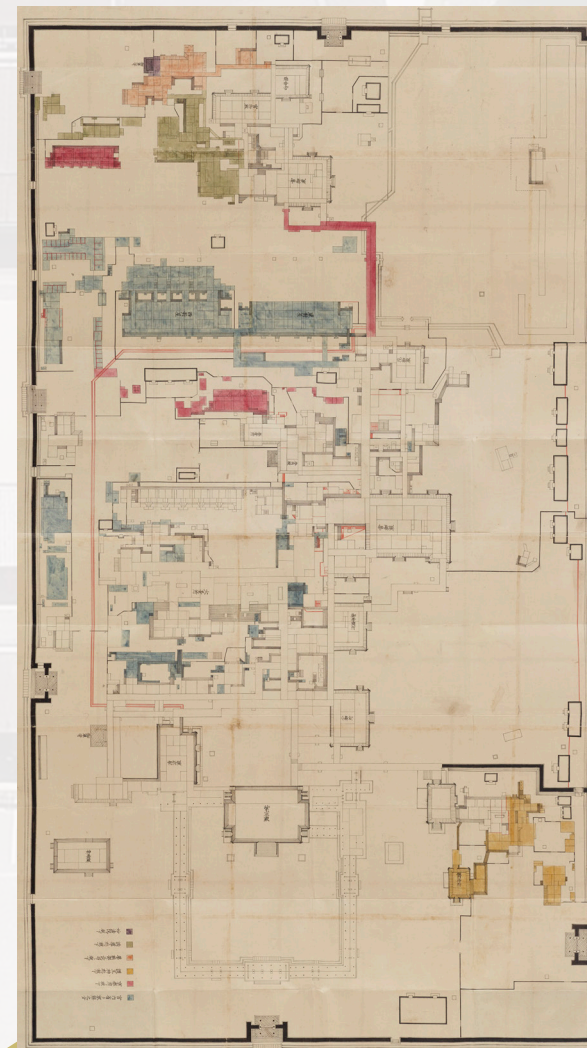
「安政度内裏指図」 宮内庁書陵部蔵

明治時代の京都御所

－ 皇居移転後の大内保存事業と御所 (実施前) －

明治2年(1869)に明治天皇が東幸されると、京都御所や周辺の公家屋敷地(御苑)は次第に荒廃していきました。同10年に京都御所に行幸された天皇は、8年の間に荒廃した光景を目の当たりにし、直ちに御所(大内)保存の勸諭を示されました。それを受けて、空き家の目立っていた公家屋敷地が御苑として整備されるとともに、岩倉具視等による現地調査が行われ、御所の不用建物の取解や下賜等が決定されました。

この図面は、明治13年2月に作成され、天皇に奏上された御所の不用建物に色付けをした図であり、宮内省にて取解の分、京都府、護王神社、華族部長局に下賜される分などに区分されています。取解の対象となったのは、内侍所仮殿や皇后宮御車寄、武家伺候の間、東西対屋のほか、各所に存在した詰所、渡り廊下、湯殿等でした。



「京都御所御不用建物取解図」明治13年 宮内庁蔵

明治時代の京都御所

－皇居移転後の大内保存事業と御所（実施後）－

保存事業の方針として、御所における重要な建物、および行幸啓で使用される建物を保存するとともに、溜池や水路などの非常用の防火設備の充実、こけらぶきやね柿葺屋根の瓦葺への変更、築地・垣の改修、土蔵に保管されている所蔵品や御庭の木石等に関する調査と整理が行われました。続いて、床を含む土台部分から建物のゆがみを直す大規模な工事や、ひわだぶきやね檜皮葺屋根の葺替、畳の新調等が順次行われました（図面は明治13年（1880）5月作成）。

明治天皇は、ふるさとである京都を深く愛され、御所への行幸時には、け蹴鞠や馬術、舟上ぎょゆうの御遊等を楽しみました。また、侍臣達と御殿を巡覧したり、複雑に入り組んだ渡り廊下や御殿の距離を予測させ、後に実測して答え合わせをするなどの遊戯を行ったりするなかで、建物の模様や由来をご教示になり、その末永い保存を願われたと伝えられています。



「京都御所御建物改正図」 明治13年 宮内庁蔵

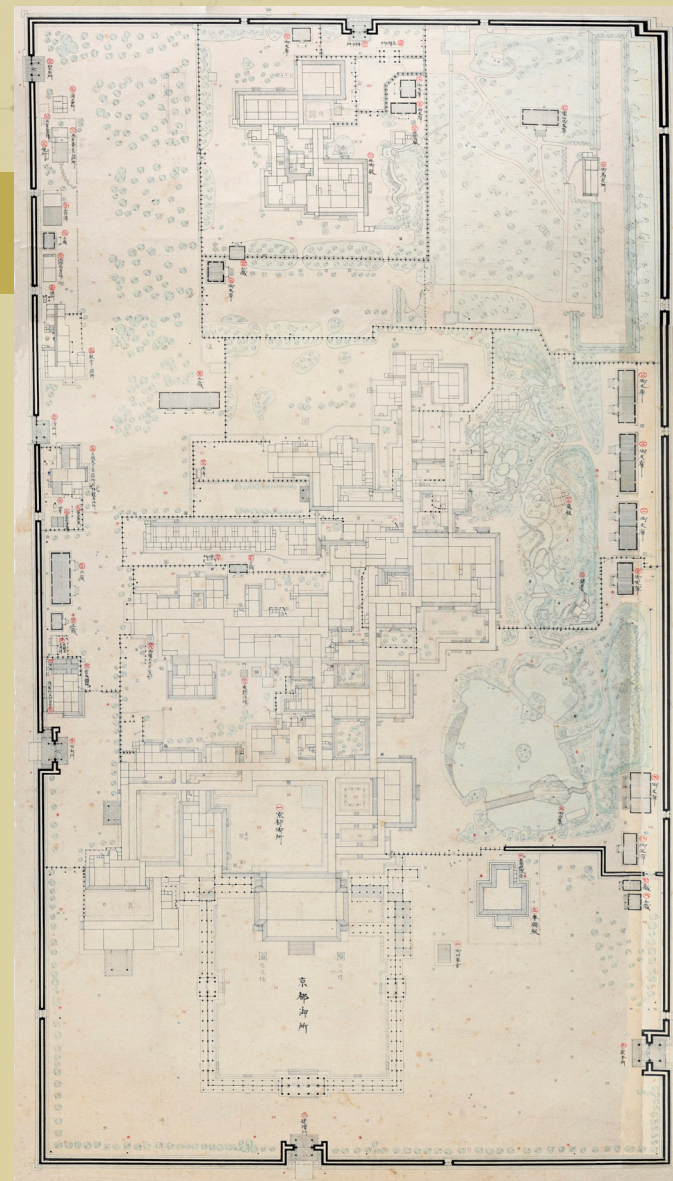
大正時代の京都御所

－大正天皇の即位礼と御所－

明治22年(1889)「即位ノ礼及大嘗祭ハ京都ニ於テ之ヲ行フ」とする旧皇室典範の制定により、大正4年(1915)11月、京都御所において大正天皇の即位礼が行われました。その際、儀式の舞台となる南側を中心に、建物の新築や既存部分の改修整備が行われました。

回廊の西側には、儀装馬車ぎそうばしゃでの行幸に備えて、新たな玄関口となる新御車寄みくるまよせがつけられました。外観には、新たにガラス窓が採用されており、内部は絨毯敷に洋風の照明を備え、外国からの賓客を含む列席者の参集所としても使用されました。

回廊の東側には春興殿しゅんこうてんがつけられ、即位礼では、ここに三種の神器の一つである神鏡を安置して、「賢所大前の儀かしどころおおまえ」が行われました。東京の賢所に準じて銅葺の建物とされ、広い前庭は、四方を仮設の垣で囲い門を開くなどして儀礼の場となりました。



「京都皇宮総図」 大正9年 京都事務所

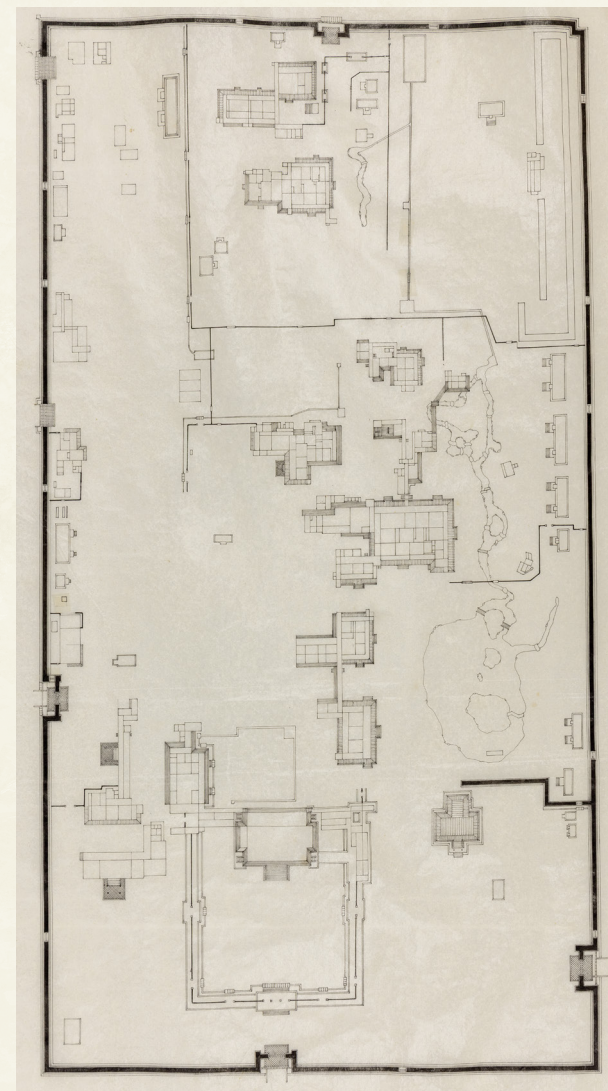
昭和時代の京都御所

－第二次世界大戦と建物疎開－

第二次世界大戦の末期にあたる昭和20年(1945)7月頃、空襲による建物の延焼を防ぐ目的で、主要な殿舎を結ぶ渡り廊下や附属建物が取解かれました。

渡り廊下で結ばれた内裏の建築空間は、坪庭^{つぼにわ}が生み出す静謐な景観と結びついてきましたが、戦時下の渡り廊下等の撤去は、切断面を古板で養生するだけのものであり、御所独特の風情は望むべくもない状況でした。

その後、当時のままの状況を目にした参観者や有識者から、復元を要望する声が届き、昭和42年から49年にかけて復元工事が実施されることになりました。復元に際して、有職故実、古建築、庭園の分野から議論が尽くされ、建物の復元と改修、防火施設と庭園の整備が行われました。



「京都御所修理前総図」(『京都御所渡廊及び附属建物復元工事報告書』より)

昭和53年 京都事務所

現在の京都御所

—宮廷文化の 保存と公開をめざして—

京都御所は、内裏の長い歴史のなかで培われた様々な用途に応じた建築様式が採用されたため、平安時代以降の建築様式の移り変わりを見ることができます。また、時に厳しい状況下で、将来へ残すべきものとは何かという選択を迫られながら変遷を遂げてきた結果、御所の本質というべき部分が残されています。

現在、保存に向けた取り組みとして、歴史資料と保存科学調査、モニタリング実験等に基づく整備事業が行われ、さらなる保全を目指して、各御殿の耐震工事が計画されています。また、平成28年(2016)7月からは、予約不要の通年公開が開始され、より多くの人々に京都御所をご覧いただけるようになりました。

京都において1,200年以上続いた内裏の伝統を、末永く後の世代に継承していけるよう、これからも保存と公開への取り組みは続きます。



「UAV画像」 令和元年 京都事務所